

七十年代後半にロックで一世を風靡した元カリスマ歌手がオーナーをする熊本県のゴルフ場に弊社のゴルフ場基幹システムが納入されることになった。熊本駅前に宿をとり、夜は馬刺しと焼酎で英気を養い、早朝に一人でいつもの散歩に出かけた。近くに虎退治で有名な加藤清正公が築城した熊本城があったので一周して見ようと歩きだした。熊本城は深い堀と武者返しと言われる石垣に囲まれ堅固な守りを誇っている。

石畳を下ってゆくと武者屋敷跡らしき町並みがあった。私は、あの松尾敬宇の家はこの辺りにあったのかもしれないと思った。あの母は武家の出のはずだと自分で勝手に決め込んでいたからである。そして、この堂々たる城を持っている街だからこそ、あの軍神松尾敬宇の母のような女性が存在したのだとも思った。

トラ・トラ・トラの真珠湾攻撃は日米開戦の火蓋を切った戦いとしてよく知られている。しかし、その六ヶ月後の昭和十七年五月三十一日夜半に日本海軍の特殊潜航艇3隻がシドニー湾深くに潜入しオーストラリア海軍の戦艦に魚雷を打ち込んだ事を覚えていた人は少ない。今も、首都キャンベラの戦争博物館に展示されているその特殊潜航艇2隻の乗組員は戦時中に十軍神となった中馬兼四(海兵六十六期・鹿児島川内中)と松尾敬宇(海兵六十六期・熊本中)の二人である。

薩摩藩の士族の出身であった中馬兼四は海軍兵学校時代、父の剣道のライバルでもあり無二の親友でもあった。二人はしばしば連れ立って三原の佛通寺に座禅を組みに通い、剣の心の精神修養に励んだと言う。そして、農家に育った父にとって理解出来ず苦しんでいた「武士の忠義」について、それがいかに大切なものなのかを語ってくれたのも中馬であった。只ひたすらに主君に帰命することの尊さを話す二十歳の青年の確信に満ちた眼は美しかったはずである。

昭和五十七年に海軍兵学校六十六期会が発行した「江田島の契り」の中で長野県出身の椎塚三夫は同期生の潜水艦乗りの戦いを報告している。その中にシドニー湾攻撃が以下のように報告されている。

十七年四月第六艦隊旗艦香取及び母艦千代田は、トラックに進出珊瑚海々戦の散開配備から帰った巡潜伊22、伊27、伊24は各々松尾艇、中馬艇、伴(六十八期)艇を搭載し、五月十八日豪州シドニーに向かって出撃した。印度洋方面の西方先遣支援と期を一にする東方先遣支援である。伊29潜の先行飛行偵察により、湾内に戦艦と大型駆逐艦の存在が確認されていた。

六艦隊は更に伊21潜をして、決行直前の五月二十九日シドニー港の黎明飛行偵察を行わせ、再度確認させたい三十一日攻撃実行を下令した。各艦は五月三十日シドニ

沖に達し、五月三十一日午後五時二十分(月出後 30)中馬艇が発進、二十分おきに松尾艇、伴艇の順で発進した。

中馬の艇は湾口の防潜網につかまり 21・30 自爆した。松尾艇と伴艇は入港する漁船のあとをつけて防潜網を外し湾内進入した。中馬艇の自爆によりシドニー湾内は嚴重な対潜警戒を実施した為、進入潜水艇の波を切って進む潜望鏡を発見した米巡シカゴ、豪駆逐艦コルベットは砲撃を開始したが潜航した特潜の一隻はシカゴに対して2本の魚雷を発射した。一本はわずかにそれで岸に突っ込んだ。一本はシカゴの艦底を通り、オランダ潜9号の艦底も通り、接岸繁留中の商船クタバルの下の岸壁で爆発し、クタバルは沈没、乗員十九名戦死、十名が負傷。湾内は大混乱となった。・・・

この戦いから始まった海の特攻隊「回天」は太平洋戦争の緒戦において戦果を挙げ、空の特攻隊「カミカゼ」を生む事になる。この戦いで戦死した息子が軍神となった母は名誉を守ることが国を守る事と同じであることを知っていた。

戦後、キャンベラでの展示セレモニーに招かれた松尾の母は「私は戦争は嫌いですが、でも皆さんが日本に無理押しをし、非道なことをなさる時は又やりますよ」と言っていて、再び大勢集まった記者達の度肝をぬかせたのである。

最近、防衛庁が省に格上げされたが情報漏えいや事務官の汚職など不祥事を起している。海兵六十六期の同期の桜は七十歳が終戦を待たずに散った。そして、残った桜もまた公職追放となり学校の教師にもなれず浪々の身となり十年近くご苦労された。その人たちの約半数が自衛隊に戻り、日本の陸海空の防衛を担ってこられたのである。その苦難の歴史をたどる時、これらの不祥事は決して許されるべき事ではない。

そして、防衛に依って戦後日本の平和が維持されてきたことを忘れてはならない。情報化時代の今日、サイバーテロは一瞬にして国民の生命や財産を消し去ってしまう危険に直面している。その防衛策として個人情報保護法が作られているが、その背景にはコンピュータのオープン化がある。ネットワーク使用が一般的になるとハッカーと呼ばれる侵入者が通信網からコンピュータに入る事件が増え、メールが電話や手紙の代わりになりだすとウイルスが送り込まれ、利用者が知らない間に貴重なデータを削除したり転送したりする。その対策としてファイヤーウォールという防御手段が生まれ、ウイルスの駆除ソフトウェアが作られた。皮肉なこととその駆除ソフトのバグが、日本中のパソコンをスローダウンさせたこともあった。

そんな経験の積み重ねが企業の情報を守りひいては国を守る力となるのである。

日本固有の文化を守る事が、国を守る力になるのだと「軍神の母」は言う。